

文字の記号化 - - 反復記号を例として

中村雅之

1. 文法化と記号化

文法研究の重要なテーマの一つに、「文法化(grammaticalization)」がある。文法化とは、単純化すれば、内容語(content words)から機能語(function words)へと変化することである。英語の「go(行く)」が「be going to」の形で未来を示すマーカーになるような例がこれにあたる。文字組織においてもこれと平行するように、文字から記号へと変わる「記号化」という現象を想定することができるのではないか、というのが本稿の趣旨である。

文字と記号の区別は本来簡単ではないが、まずは直観的な捉え方で済ませておく。つまり、漢字やアルファベットは通常は文字、句読点や引用符は記号である。仮名の濁点や半濁点も、文字の一部であるといえ析出可能であるから記号と見なしうる。これらのはじめから記号であって、文字が記号化したものではない。これに対して、例えば英語の「etc.」などは、文字によって構成されてはいるが、実態はかなり記号に近い。もともとはラテン語「et cetera」の縮約形であるが、「and so forth」と「訓読み」されることも珍しくない。日本語の「等々」も同様で、「トウトウ」と読んだり「などなど」と読んだりするが、実は読まれることはそもそも期待されておらず、ほぼ記号化していると言える。

2. 反復記号「ㄥ」の記号化

文字の記号化についての興味深い事例として、反復記号「ㄥ」を挙げることができる。この記号は、時代によりあるいは文字の体系によって、形態的に種々のバリエーションを生んだ。日本語においては、漢字では「人々」の「々」、平仮名では「つくく」の「く」というように、体系ごとに異なる形態を持っている。

中国ではすでに周代の金文にこの記号が用いられており、そこでの形態は同じ長さの水平な平行線「=」である。すなわち数字の“2”を表す文字と同形であり、この記号の由来が数字の「二」(上の線が短くなるのは後のことである)にあることを如実に示している。「2回繰り返せ」というのがこの記号のもともとの意味であり、文字から記号化したものと言うことができる。金文に頻見する「子々孫々、これを宝として用いよ」という表現の「子々孫々」は実際には「子孫」という文字のそれぞれに小さな「=」が付属した表記である。

3. 唐代における反復記号の発展

唐代に入ると、反復記号は独特の発展を遂げる。すなわち字書類における見出し字の反復という役割を獲得するのである。その発展段階を如実に示しているのが、切韻残巻と総称される写本群で、そこには三つの段階が確認される。

第一段階は、周代の用法と基本的に同様であり、訓注の初字に見出し字と同じ字が来る時に、それを反復記号で記すものである。この場合、反復記号は見出し字の直後に位置している訳であるから、何ら特殊な用法ではないと言ってよい。ex.「橄 〃 欖木名/出交陟」

第二段階では、割注形式の訓注において第二行の首字にも反復記号が用いられる。この段階で「見出し字の直後」の位置から離れる訳であるが、実は外見上、見出し字と接していることが、この位置での使用を可能にしたと考えられる。ex.「峒 崆 / 〃」

第三段階になると、どの位置でも自由に反復記号が用いられるようになる。見出し字と同じ字が訓注の中で用いられる際に、自由に反復記号に置き換えられる訳である。ex.「脛 脚 〃 戸/定反一」

4. 記号化の段階

文法化では、しばしば音形の縮約(contraction)を生じることが指摘されている。「be going to」の場合に、口語で「(be) gonna ~」となるのがその例である。記号化にも平行例を見出すことができる。韻書・字書類における反復記号は10世紀頃から直線化するのである。それまでの数字の「二」との関連を断ち切るかのように、一字分の縦線一本に変化する。この変化が、唐代における反復記号の用法の発展の結果であることは明らかであろう。数字の「二」とほとんど無縁に思えるまでに記号化した結果として、その形状もより単純になったのである。その結果、この記号はもはや直前の字の反復ではなく、見出し字の反復のみを意味することになり、もとの文字の意味から離れた純然たる記号へと進化(深化?)を遂げた訳である。

文法化に段階が認められるように、文字の記号化にも段階があることを反復記号の例は教えてくれる。そして文字が記号化された時に、その記号がどの段階にあるかを意識しておくことは、文字組織全体の研究にとっても重要である。例えば、明初の漢字音訳において、漢語の[! -]をモンゴル語の[r -]に読ませるための小字「舌」や、漢語の[- n]をモンゴル語の[- !]に読ませるための小字「丁」などは、記号化のどの段階にあるのか。また『元朝秘史』で「丁」が廃され、「勒」に統一されるのが、文字の記号化を(その段階が浅かったために)嫌った結果ではないのか、という視点を探ってみるのも面白い。記号化の研究は、文字研究にとって大きく発展する可能性を秘めた分野と言えるのである。